

気になるあの子、その後

若井誠二（カーロリ大学）
szeidzsi@yahoo.co.jp

【要約】

本研究では複線径路・等至性モデリング (TEM) の手法を用いて、継承語として日本語を学ぶ「はなこ (若井 2016, 2017)」がどのような経緯を経て自律的日本語学習者に成長していったかを記述した。結果、自分の環境や特徴に合った学習法の導き出しにつながる経験、その成果の実感が自律的日本語になるための大きな要因となっていることがわかった。また、母親の地道な日本語環境の整備がそこに大きく貢献していたことも明らかになった。

1. 背景

これまで日本語教育連絡会議では、若井・若井 (2015) が継承日本語グループ K における、「高い組織化」と「高い自由度」を保障する取り組みについて紹介した。そして、若井 (2016, 2017) が、K に参加する「はなこ (仮名)」に注目し、「高い組織化」と「高い自由度」を保障する取り組みの中でははなこの成長を紹介した。

はなこは、若井 (2016) で取り上げた時点では、K 以外に日本語環境がなく、発話文も単純で、ほぼ聴解型のバイリンガルであると言えた。

表 1. はなこの K 以外での日本語環境 (若井 2016, 表 2 より抜粋)

| |
|--|
| 日本人親と同居せず。ハンガリー人母は日系企業通訳。 母子のコミュニケーションはハンガリー語。 母親は継承日本語への関心が高い。 はなこも継承語クラスを嫌がっている様子はない。 |
|--|

表 2. はなこが使用した最も複雑な文例 (若井 2017, 表 10 より抜粋)

| |
|---|
| 2015 年: 「ええと、さるが食べた。」 2016 年: 「おかあさんが、なんか、これを言った。」 |
|---|

しかし、その後も K に通いつけたはなこは、2024 年に日本語 B2 試験に合格するなど、日本語能力を向上させた。現在 K で教えている教師に聞いたところによると「はなこは、気が付いたら日本語が上手になっていた。今は自分の考えを日本語で表現することができる。」とのことであった。そこで、「はなこ」がどのようにして、自身の日本語を上達させていったのかを調べることにした。

2. 方法

本調査では、はなこが自分の考えを日本語で表現することができる、すなわち自律的な日本語使用者となった経緯を見るため、TEM (Trajectory Equifinality Modeling: 複線径路・等至性モデリング)

を採用した。

人間は外界との関係（日常生活の中の法律や社会制度、生活環境、地域社会の規範、家族や友人のアドバイス）などに基づき、思考と行動を維持・適応させるオープンシステムと見ることができる（神崎・サトウ 2015）。オープンシステムには、異なる経路をたどって同じような結果に至るという特徴がある。これを等至性と呼び、等至性が達成される点を等至点と呼ぶ。TEM はある等至点を対象にして、そこ至るまでの人々の人生径路を不可逆的時間の中で記述しモデル化する手続きである。なお、TEM を描く際には表 3. に示す要素を組み合わせて作成する。

表 3. TEM 図で描かれる要素（福田 2019）

| | |
|------------------|--|
| 等至点 (EFP) | 人々が異なる経路をたどった後に至る同じような結果。 |
| 両端化した等至点 (P-EFP) | 至りえる別の等至点。両端化した等至点を設定することで、現実には発生しうるが実際には発生しなかった経路のモデル化も可能となる。 |
| 経路の範囲 (ZOF) | 等至点と両端化した等至点の間にある選択可能な経路の範囲。 |
| 分岐点 (BFP) | 等至点に至る道を複数発生させながらも人々を等至点へ導く点。 |
| 必須通過点 (OPP) | 等至点に至るまでに多くの人々が共通して経験する出来事。 |
| 社会的助勢 (SG) | 個人を等至点へと後押しする力。 |
| 社会的方向づけ (SD) | 個人を等至点から遠ざけようとする力。 |
| 非可逆的時間 | 等至点に至るまでの時間の流れ |
| 実線矢印 | 等至点に至るまでに実現された経路 |
| 点線矢印 | 等至点に至るまでに、実現可能性は高いが実現されなかった仮想経路 |

本調査では、「自律した日本語学習者に成長した」を等至点とし、はなこにそこに至った経緯についてインタビューを行った（2024年7月）。インタビュー時は、「困ったときにはハンガリー語を使用してもよい」と伝えていたが、インタビューはすべて日本語のみで行うことができた。この際、はなこは筆者の質問にも自らの考えを的確に答えており、「自分の考えを日本語で表現することができるようになった。」とのKの教師の評価にも納得ができた。

表 4. インタビュー（2024年7月）における、はなこの発話例

| |
|---|
| あまり、なんか、ちっちゃい時、なんか、日本で住んだ時のことはあまり覚えていない。おじいちゃんとおばあちゃんと住んで、そこで幼稚園には行ったことがあります。母と一緒に、こう、日本語をしゃべって、なんか替え歌もうたったとか、テレビを見たり、本を読んだりして・・・ |
|---|

インタビュー後、内容を文字化しストーリー化させ、そこから筆者が TEM 図を作成した。その後、作成した TEM 図をはなこに見せ、はなこが納得するまで TEM 図を修正した（計 2 回。2024 年 8 月、9 月）

3. 結果

はなこの TEM 図を見ると、はなこは以下の 4 つの時期を経て等至点に達していることがわかった（図 1~4）。以下、それぞれの時期について説明を行う。

- 第1期：誕生→ハンガリーに移住→小学校入学まで 「日本に対するよい思い出」
- 第2期：小学校入学から6年生まで 「日本語は嫌いじゃなけど、話したくない」
- 第3期：6年生から11年生まで 「日本語が好きになった。でも勉強はこりごり」
- 第4期：11年生から大学入学後まで 「自分の意思で日本語の勉強を始め、成果を得た。」

3.1 第1期（誕生から小学校に入学するまで）

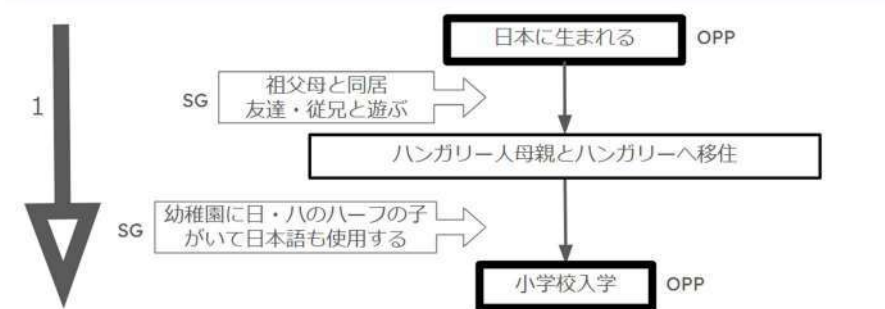


図1. 第1期

はなこは、東京で生まれた。小さい頃の記憶はあまりないが、祖父母と暮らしており、幼稚園に通いながら、母と一緒に日本語を話したり、歌を歌ったり、テレビを見たり、本を読んだりして過ごしていた。年下の従姉弟が2人おり、特に女の子の従妹とはよく遊んでいた。幼稚園でもたくさん友達がいいて、毎日楽しく過ごしていた。その後、何度か日本とハンガリーを行き来するようになり、3～4歳の頃、ハンガリー人の母親と2人でハンガリーに移住した。ハンガリーの幼稚園には、自分と同じハンガリー人と日本人のハーフの子がおり、ハンガリー語だけではなく日本語を使う機会もあった。第1期は、はなこがかなり小さい頃の話であるので、アルバムや母親の話しで記憶が補完されているようであったが、日本や日本語使用が楽しい思い出となっている時期だと言える。

3.2 第2期（小学校に入学してから、日本のアニメ・ユーチューバーと出会うまで）

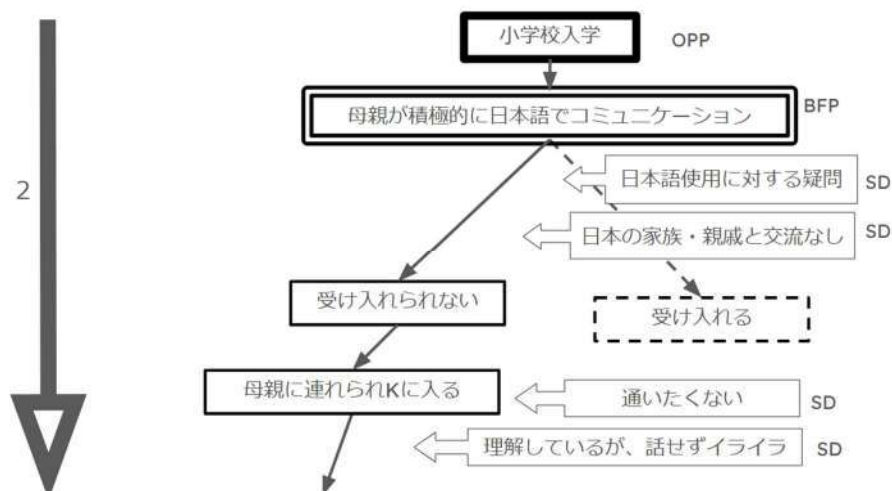


図2. 第2期

はなこは、小学校に入学した。学校では皆ハンガリー語を話しており、はなこも、ハンガリー語で生活をしたいと感じていた。しかし、母親が「日本語で話そう」と日本語で話しかけてきたり、日本語カルタ、映画、本などをを使い、はなこ積極的に日本語の勉強を始めるようになった。はなこは日本語が嫌いではなかった。しかし、ハンガリーに住んでいるし、母親もハンガリー人なのに、なぜ日本語を勉強するのか理解できなかった。そのため、母親が日本語で話しかけても、日本語で返事をしたくないと思うようになった。母親はそれほど強く日本語の勉強を強いていたわけではなかったが、毎週土曜日にはなこをKに連れていくようになった。家庭以外で日本語に触れることができたのはKだけではあったが、週末に早起きするのが嫌で、はなこは本心ではKには行きたくなかった。Kでは、先生の話やクラスメートの話、授業の内容は理解できた。しかし、話すのが苦手だった。全部理解できているのに、話すことができなかったため、いつもイライラしていた。第2期は、日本語は嫌いではなかったものの、本人の意志に反して日本語学習・日本語での会話が強制されたため、それに反発していた時期だと言える。

3.3 第3期（日本のアニメ・ユーチューバーと出会ってから、高校卒業試験受験を決意するまで）

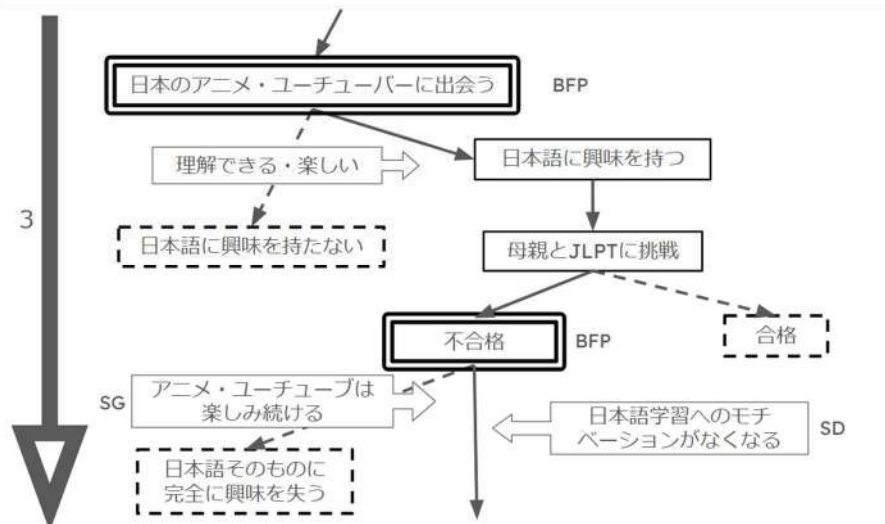


図3. 第3期

はなこは6年生の時、日本のアニメを見るようになった。その後、日本人ユーチューバーの動画も楽しむようになった。アニメや動画では、たまにわからない言葉もあったが、何度か見ているうちに、それも理解できるようになった。こうしてはなこは日本語でアニメや動画を楽しみ、日本語への興味も深まっていった。ただし、日本語を勉強することに対しては、それほど興味は湧かず、Kにも母親に連れられて参加はしていたものの、行きたいとは思わなかった。その頃、日本に出張に行った母親が JLPT の問題集を買って帰ってきた。これらの問題集を見たところ、楽しそうに見えた。そして、母親の「自分も受験するから」との誘いもあり、母親と一緒に JLPT-N5 の勉強を始めた。しかし、はなこはぎりぎりのところで合格できなかった。このため、はなこは日本語学習に対するモチベーションを大きく失なった。その後も、アニメやユーチューバーの動画は見続け、それを楽しんでいたが、日本語を勉強することはなくなった。(この時期については、K の教師も「この時期、はなこは完全に日本語学習に対する興味を失ったようだった」と述べている。) 第3期は、はなこが日本語に対する興味を持ち始め、

自らの意思で多くの日本語に触れるようになったが、日本語学習の成果が見えず、日本語の勉強に対する興味を大きく失ってしまった時期だと言える。

3.4 第4期（高校卒業試験受験を決意してから）

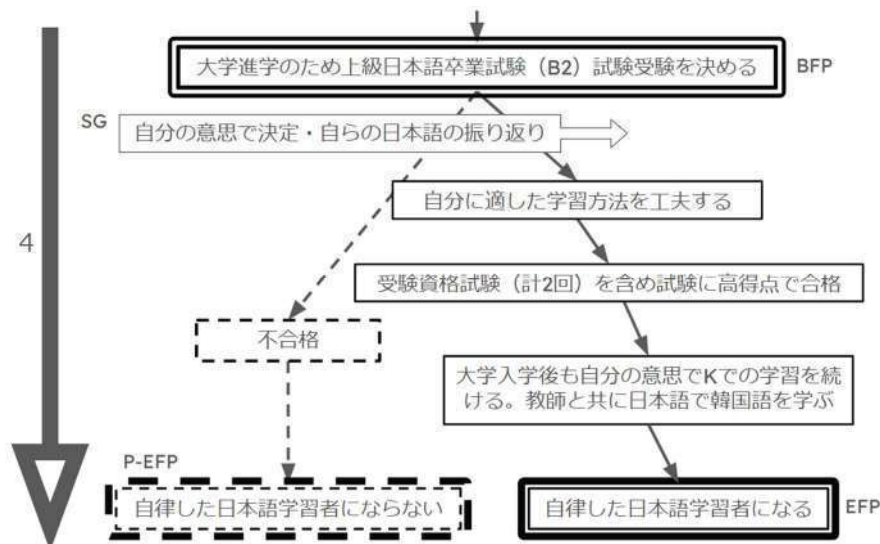


図4. 第4期

はなこは、コロナ禍でKがオンラインとなった際に「早起しなくてもよい。」と嬉しかった。しかし、コロナ禍が過ぎてもKがオンラインでの授業を続けることになった結果、友達と直接会って話すことの楽しさが恋しくなっていた。11年生（日本で言うところの高校2年生）になり、大学進学を意識するようになってきたころ、はなこはB2レベルの上級日本語高校卒業試験を受けることを決意した。ハンガリーの高校卒業試験は5科目を受験するが、そのうち2科目を大学入試科目として利用することができる。はなこが志望した大学の情報工学学科では日本語を受験科目にすることはできなかったが、外国語の上級卒業試験に合格すると、入学試験に加点がなされる制度があった。英語で上級卒業試験を受ける選択肢もあったが、はなこは英語がそれほど得意ではなかったため、日本語の上級卒業試験を受験した。はなこの高校では日本語教育が行われていなかったため、日本語の上級卒業試験を受験するためには、日本語教育が行われている高校で2度、卒業試験受験資格試験を受ける必要があった。このため、はなこは、これら2度の資格試験、そして上級卒業試験に合格し、自分の志望する大学・学科に入学するため、初めて自分の意志で日本語を勉強し始めた。外国語上級卒業試験は、「言語の正しさ」「読解」「聴解」「作文」「会話」という5つの試験で構成され、すべて受験言語のみ（例えば、日本語の試験は問題文や回答を含めて日本語でのみ記述される）で行われる。上級卒業試験の問題は、はなこにとって易しいものではなかったが、自宅やKで1つ1つ過去問に取り組むことにより、わからない問題を克服していった。はなこにとって最難関の試験は「会話」試験であったが、自らの頭の中に話し相手を創造し、その相手と会話をする形で会話練習を行った。こうすることにより、徐々に自分の考えを日本語で表現できるようになっていった。その他に、世界中の日本語学習者が集まるオンライングループにも参加し、剣道をしており日本語にも興味を持つマルタ人に日本語を教えたりもした。これらの経験を通じて、はなこは日本語能力を伸ばし、受験資格試験、上級卒業試験すべてに高得点で合格し、無事志望する大学・学科に入学することができた。はなこは、高校卒業後もKでの学習

を続けたいと願うようになり、大学入学後は、韓国留学経験がある K の教師と共に、日本語で韓国語を学んでいる。また、母親とは、他の人に内容を聞かれないように「共通の秘密の言語」として日本語会話を楽しむようになった。母親と新しいパートナー（ハンガリー人）との間に妹が生まれたが、母親に「はなこちゃん日本語できるよね。代わりにお願い」と頼まれ、妹に日本の歌を歌ったり日本語の絵本を読んだりしている。第 4 期は、はなこが自分の意思で日本語の学習を初め、自らの日本語を振り返り自分に合った学習方法を工夫し、成果を実感することにより自律的な日本語学習者となった時期だと言える。

4. 分析

TEM のデータより、はなこの学習方法や花子を取り巻くファミリー・ランゲージ・ポリシーを分析すると以下ようになる。

4. 1 学習方法

K の教師より「はなの日本語能力が高くなった」と聞いた際、筆者はその原因として以下の 2 点があるのではないかと予想した。

1. 中等教育機関で日本語を学ぶ生徒のように、はなこが「外国語としての日本語」として日本語を学び始めた。
2. 母親が（妊娠したため）企業通訳の仕事を辞め、家にいる時間が長くなった。このため母親との日本語使用環境が増えた。（あるいは母親が日本語を教え始めた。）

しかし、TEM を見ると、そのいずれでもなかった。はなこは、日本のアニメやユーチューバー動画を何度も見ることにより理解を深めていたり、自らの頭の中に話し相手を創造し、その相手を会話を続けることで会話能力を伸ばすなど、聴解型バイリンガルである自身の日本語能力を活かして、自身の日本語能力を伸ばしていた。

4. 1 ファミリー・ランゲージ・ポリシー

はなこは、日本人である父親や祖父母と別れて、3～4歳の頃、ハンガリー人の母親とともにハンガリーに移住した。この時点で、はなこの継承語はハンガリー語から日本語にシフトした。家庭内に日本語母語話者がいない中、母親は、「自分が日本人であることに誇りをもってほしい（若井 2016）」との気持ちから、はなこが学齢期に達した頃、はなこが日本語を忘れないよう、積極的に日本語で話しかけようとした。しかし、はなこはこれに反発した。その様子を見て、母親は「日本語で話すことに関してはどうしてよいかわからない。無理強いほしくないが、はなこが自分で文が組み立てられるようになってほしい。」と願い（若井 2016）、はなこを K へ通わせ始めた。母親は「（はなこは K に通っていることを）嫌がっている様子はない（若井 2016）」と感じていたが、実際には、はなこは K に嫌々通っていた。小学校 6 年生になり、はなこが日本語のアニメやユーチューブ動画を積極的に見るようになり、日本語に興味を抱くようになった姿を見て、母親は非常に喜んだであろう。それで日本への出張時に JLPT の問題集を購入し、「自分も JLPT を受験するから一緒に日本語を勉強しよう」と誘ったのだろう。はなこはこれに同意したが、試験には合格できず、K も含めて、日本語学習へのモチベーションを失っ

てしまう結果となった。一方、コロナ渦を経て、Kでクラスメートに会えなくなったことで、はなこのKに対する意識が少し変わり、志望大学学科へ進学するため、自分の意思で日本語学習を始めた。この段階では母親は、はなこの日本語学習には直接関与はしなかった。はなこは、Kにも積極的に参加するようになり（Kの教師談）、自らの日本語を振り返り、学習法を編み出し、目標を達成したことで、大学入学後もKでの学習を続けたいという気持ちになった。母親ははなこの日本語学習へは関与しなくなったが、秘密の言語としてはなこの日本語会話を楽しんだり、妹への日本語サポートをはなこに頼むと言う（家族としてとても自然な形で）日本語環境を維持している。TEMを見る限り、母親のはなこに対する日本語学習への（日本語で話しかけたり、日本語を教えたり、一緒に勉強をしたりという）直接的関与は、はなこを自律した日本語学習者にする大きな力となっていたようには見えない。しかし、はなこが嫌がっても母親があきらめずにKに毎週送り続け、はなこがKと繋がっていたことは、はなこが自らの意思で日本語学習を始めた際に重要なリソースとして機能していた。

5. 今後

はなこは、今後はまずは英語を勉強し、その後にまた日本語をもっと勉強し、もっと喋れるように、漢字をちゃんと読んで書けるようになりたいと考えている。一方で、日本には一度旅行したいとは思っているが、日本に住んだり、働いたり、あるいは日本人と積極的に交流を持ちたいとは考えてはいない。はなこは家庭では母親と秘密の言語として日本語会話を楽しんだり、年の離れた妹に日本語で歌ったり本を読んだりしており、Kでは、日本語で韓国語を学ぶなど、日本語を通じて自分の世界を広げ始めている。また、オンライングループで知り合ったマルタ人とも、一度、日本語でも話してみないとも考えているようだ。

はなこが日本語を使い、他者との交流を広げ、どのように世界を広げていくのかという点、つまり「日本語ネットワークを拡大させた」という点が、次の展望を示すセカンド等至点（Second Equifinality Point: S-EFP）（安田 2019）となるのかもしれない。折を見て、はなこのその後を調査することを今後の課題としたい。

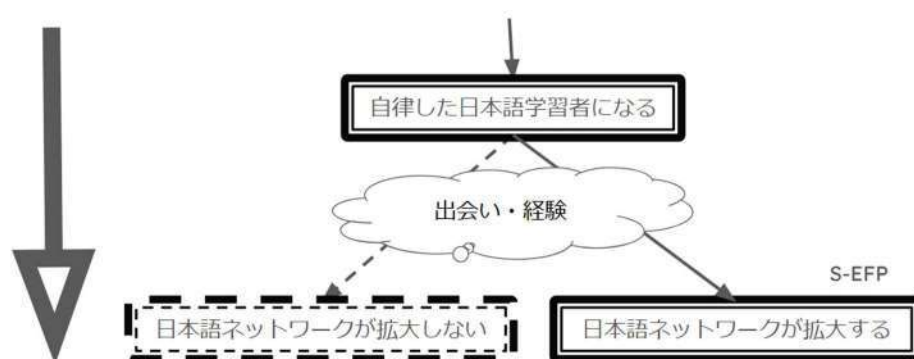


図 5. はなこの今後

参考文献

神崎真美・サトウタツヤ (2015) 「開放システムと形態維持」『TEA 理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』、新曜社、PP. 14—18.

- 福田麻莉 (2019) 「複線径路・等至性アプローチ (TEA)」木戸彩恵・サトウタツヤ (編) 『文化心理学：理論・各論・方法論』ちとせプレス, pp. 243-254.
- 安田裕子 (2019) 「TEA (複線径路等至性アプローチ)」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編) 『ワードマップ 質的研究法マッピング』新曜社, pp. 16-22.
- 若井誠二・若井ベルナデッテ (2015) 「継承語グループでのささやかな取り組み」『日本語教育連絡会議 (2014) 論文集 Vol.27』, pp. 103-112.
- 若井誠二 (2016) 「継承日本語クラスにおける「気になるあの子」」『日本語教育連絡会議 (2015) 論文集 Vol.28』, pp. 92-101.
- 若井誠二 (2017) 「継承日本語クラスにおける「気になるあの子2」」『日本語教育連絡会議 (2016) 論文集 Vol.29』, pp. 1-9.